

個 体 と 全 体

—ホーフマンスタール《世界小劇場》の問題—

小 松 崎 直

ホーフマンスタール (Hugo von Hofmannsthal 1874-1929) は1897年に書いた抒情劇《小世界劇場》(Das Kleine Welttheater) に——或いは幸福な人びと (oder die Glücklichen)——という副題を与えている。またこの劇について詩人は《私自身について》(Ad me ipsum) と題されたノートに次のように記す。「これらの幸福な人びとのすべてがなおなんらかの形で最高の世界の一員です。最も完全に関与しているのは狂気の男です。」⁽¹⁾ この作者の発言を手がかりの一つとして劇そのものの展開を追ってみよう。先ずト書きは以下の通り。「舞台は橋の縦断面を示す。アーチ型のため中央が左右よりも高い。背景になっているのは石でできた橋の欄干。その後ろに夕方の空、そして少しはなれて何本かの木々の梢、川辺の景色を思わせる。」同じ1897年の8月に父親に宛てた手紙の中でホーフマンスタールは「7~8人の登場人物の一種の人形芝居形式の抒情的対話の行なわれる小品」の構想を語るが最初に登場する詩人に続く人物は8人、舞台裏から声のみがきこえる人物が1人、合計9人だが最後に登場する3人を除いて舞台上に2人の人物が同時に居合わせることはない。最後に同時に登場する3人もそれぞれが自らの科白を述べるだけであって劇全体を通して対話は全く行なわれていない。舞台にまず登場する詩人は黒いマントを着ている。時刻は夕方。彼はこの夕暮れを詩的ではあるが、明確な形をとらない人物達で活気づける。そしてその人物達の運命のうちに自分が織りこまれていると感ずるのである。身をこごめて、長い道中のために靴の紐を編む旅人。山腹を魔法でもかけられたように苦しげにのぼっては藪のすべてと苦闘している巡礼。不思議に疲労してしまった者。水浴びをする戦士。甲冑をつけた者。岸辺で体を起こし、恐ろしい目つきで川をふりかえっている一人の男が詩人の心を捕える。しばらくは眼を波

の上をやったまますべりつづけるこの泳ぎ手を彼の視線は追うがやがて他のものたちを眺める。すべての結合を、つまりホーフマンスタールの関連の世界を経験することによって詩人の心の中でこれらのすべてが会うことになるのである。未だに見るだけの者には夢と生とが、どこでわかれるのかを区別することが出来ない。しかし詩への道は既に示されている。

舞台は一層暗さを増す。夜は更けたのである。ここで詩人は森のはずれに腰を下ろす。そこには小さな沼が未だ長いこと昼間の輝きを保ち、この風景の開いた眼差しが、しめった火花で輝いている。

Wenn ich auf die hinsehe, wird es mir
 Gelingen, das zu fertigen, wofür
 Der Waldgott gern die neue Laute gäbe
 Aus einer Schildkrot, überspannt mit Sehnen :
 Ich meine jenes künstliche Gebild
 Aus Worten, die von Licht und Wasser triefen,
 Worein ich irgendwie den Widerschein
 Von jenen Abenteuern so verwebe,

この風景を見ていると、あれを
 うまく作れそうだ。森の神が
 鱧甲でできた弦を張った
 ラウテをそのためにくれるようなものを。
 私が言うのは言葉でできた
 模様織り。その言葉は光と水から

したたり落ちたもの、そこに私は
あの冒険の反映を織りこむのだ、

ここに観察された冒険の反映の余韻を見出し、新たに循環の中に入って
ゆかなくてはならない。つまり

Daß dann die Knaben in den dumpfen Städten,
Wenn sie es hören, schwere Blicke tauschen
Und unter des geahnten Schicksals Bürde,
Wie überladne Reben schwankend, flüstern:
„O wüßt ich mehr von diesen Abenteuern,
Denn irgendwie bin ich dareinverwebt
Und weiß nicht, wo sich Traum und Leben spalten.“

そんなとき活気のない町に住む子供達は
それをきくと重い眼差しを交わして
予感された運命のもとで、まるで
房をつけすぎたぶどうのように囁くのだ。
„もっとこの冒険のこと知っていたら、
なぜならどうしてなのか、この中に織り
こまれてしまって、どこで夢と生とが
わかれているのかわからない。“

のであるから。

詩人は退場し、庭師が登場する。射るようなしかし美しい眼差しの老人。
如露と鞆皮製の小さな籠を持つ。彼は以下のように語る。

Ich trug den Stirnreif und Gewalt der Welt
Und hatte hundert der erlauchten Namen,
Nun ist ein Korb von Bast mein Eigentum,
Ein Winzermesser und die Blumensamen.

Wenn ich aus meinem goldnen Haus ersah
Das Blumengießen abends und am Morgen,
Sog ich den Duft von Erd und Wasser ein
Und sprach : Hierin liegt großer Trost verborgen.

Nun gieß ich selber Wasser in den Mund
Der Blumen, seh es in den Grund gesogen
Und bin vom Schatten und gedämpften Licht
Der ruhelosen Blätter überflogen,

Wie früher von dem Ruhm und Glanz der Welt.
Der Boten Kommen, meiner Flotte Rauschen,
Die goldnen Wächter, Feinde, die erblaßten :
Befreiung wars, dies alles umzutauschen

Für diese Beete, dieses reife Lasten

Der Früchte, halbverborgen an Spalieren,
Und schwere Rosen, drin die goldig braunen
Von Duft betäubten Bienen sich verlieren.

Noch weiß ich eines : Hier und Dort sind gleich
So völlig, wie zwei Pfirsichblüten sind,
In einem tiefen Sinn einander gleich:
Denn manches Mal, wenn mir der schwache Wind

Den Duft von vielen Sträuchern untermengt
Herüberträgt, so hab ich einen Hauch
Von meinem ganzen frühern Leben dran,
Und noch ein Größres widerfährt mir auch :

Daß an den Blumen ich erkennen kann
Die wahren Wege aller Kreatur,
Von Schwach und Stark, von Üppig oder Kühn
Die wahre Art, wovon ich früher nur

In einem trüben Spiegel Spuren fand,
Wenn ich umwölkt von Leben um mich blickte :
Denn alle Mienen spiegelten wie Wasser
Nur dies : ob meine zürnte oder nickte.

Nun aber webt vor meinen Füßen sich
 Mit vielen Köpfen, drin der Frühwind wühlt,
 Dies bunte Leben hin : den reinen Drang
 Des Lebens hab ich hier, nur so gekühlt,

Wie grüne Kelche sich vom Boden heben,
 So rein und frisch, wie nicht in jungen Knaben
 Zum Ton von Flöten fromm der Atem geht.
 So wundervoll verwoben sind die Gaben

Des Lebens hier : mir winkt aus jedem Beet
 Mehr als ein Mund wie Wunden oder Flammen
 Mit schattenhaft durchsichtiger Gebärde,
 Und Kindlichkeit und Majestät mitsammen.

私は額に飾りをつけ世の権力を有していた、
 そして百もの貴顕の名をもっていた、
 いまや鞆の籠が我が持物
 ぶどうをつむナイフと花の種が。

私の黄金の宮殿から夕方、そして朝
 花に水をやる様を見やるたびに
 私は大地と水の香気を吸いこむのだった。
 そして言った。あそこに大いなる慰めがかくされている、と。

今私は自ら水を花の口にそそぎ
それが大地に吸いこまれるのを見る
そして休みなく動く葉の
影や弱い光におおわれている、

その昔世の名声や栄光によってのように。
使者の到着、船群のざわめき
黄金の守備兵、色を失った敵兵。
心を解き放つことだった、これらすべてをとりかえることは

この花壇、垣根になかば身をかくしている
果物の豊かな重みや芳香にうっとりしている
金と茶色の蜜蜂が身をかくす
どっしりとしたバラととりかえることは。

更に一つのことが私には分る。こことあそことは同じなのだ。
二つの桃の花のように完全に
深い意味で互いに同じなのだ
なぜならときおりかすかな風が

さまざまな灌木の香りを混ぜ合わせて
運んでくると私はそこにかつての全生涯の
香りをかぎとり、もっと大きなことも私の
身には起るのだ。

花を見て私はすべての創造物の
真の道を知ることが出来るということだ。
弱さも強さも、豊かさも大胆さも、
その真のあり方が。それを私はかつては、

曇った鏡の中にその面影を見出していた、
生に心を曇らされてあたりを見まわすたびに。
なぜならすべての表情は水のように
ただこのこと；私の怒った表情かうなずいた表情かを映して
いただけだったから。

けれども今は私の足もとで
春風にかきまわされるたくさんの頭をもった、
いろとりどりの生が織りなされている
純粹な生の衝動を私はここで手にするのだ

それはただ緑のうてなのように冷たく大地から身を起こす、
清らかに、みずみずしく、若者には息をととのえて
笛の音にすることが出来ない程。
それほどすばらしくここでは

生の贈り物が織り合わされている。
どの花壇からも、口よりも多くのものが、
傷口や炎のように、影のように透き通った身振りで

子供らしくも堂々とした身振りで私に合図する。

これが庭師の全科白である。歌うように語られる言葉は一貫した4行詩であり、2行目と4行目が脚韻をふんでいる。夢幻的で、魔術的とも言える詩人の韻を持たない科白とははっきりと異なっている。移行的、滑走的でリズムにのみ導かれる性格は、音節の構成、韻律のもつ躍動感によって客観的な、造形的な性格へととって代わられたのである。しかしこのような外観上の大きな差異にも拘らず、詩人のひそやかな問いかけと、彼の詩によって心を動かされた子供の問いかけとは庭師の姿のうちに既に解決され、解答がなされているだろう。この庭師は真に生き抜かれた、運命的な生涯を送ってきた。この老人は夢と生との分裂をとくに運命のうちに残してきたのだ。その運命は大きな対比として経験されてきたのである。一方は額の飾りと世界の権力。他方は韌皮の籠とぶどうをつむナイフと花の種。この問題は高いところから低いところへの転落などではなく、この世の栄光と名声とを花壇や果実の手入れと自由意志で交換することなのだ。はじめに損失の如くに見えたものが庭師の科白のうちに利益として姿を現わす。つまり支配権とその栄光のもつ絶対的な権力に否定的な面が存するのである。自我の優位が保たれていては人間と物とに至る道は閉鎖されたままであり、無限の権力は真の認識の欠如を以って補なわれねばならない。王がどんな表情をしても、自己がゆがんで現われてくるときには、すべての存在はまるで曇った、物をゆがめる鏡を見るように経験されたのである。しかし黄金の宮殿から夕べに、朝に „花に水をやることを眺めるうちに、また地と水との香りを吸いこむことのうちに既にかつての支配者は確信を増してゆく。“ „あそこに大いなる慰めがかくされている“ のである。今や庭

師は永遠に慰めとなるものを見出す。今や彼のまわりにいるすべての生物の中に写し出されているものは自身の自我の全権力などではなく、純粹で曇りのない存在、„すべての創造物の真の道“なのである。支配がここでは認識へ、奉仕へ、自己をはるかに越えた高い経験へと姿を変えてしまっているのである。

庭師の科白の中ではっきりと述べられていることがある。その一つは„こことあそこ“の同一化である。はじめは途方もない交替のように見えたものが、生の夢のもつ統一体として姿をあらわす。この生の夢の動機はホーフマンスタールの若い時代を支配するもので、感じられただけの、未区分の生の全体を意味する。この内部ではすべての個体が全体に対して魔術的な連関を持っているのである。この生の夢の中ではかつての生と今の生とは深い意味においては等しいものとなる。庭師としてもかつての支配者は王でありつづけられた。今はじめて運命によって彼自らに与えられた課題は完全にその達成を見たのである。このことは彼の第2の経験、彼の言うところに従えば、もっと大きな経験に於いて極めて明確なものとなる。装った存在がありのままの存在に変化する。庭師は„真のあり方“というが、それは彼が花の助けをかりて今はじめて認識することが出来るものなのであり、彼の道は自我から離れて超自我へと通じてゆく。„真実“と„生“とは互いに関係し合う概念であり、これが庭師の言葉のうちに隠喩的に高められている。利己的でない、純粹な認識にはじめて偏見のない関与が純粹な自然に対して与えられる。„生の贈り物“についてが問題なのである。この贈り物は感覚的自然の形式世界として単純に理解されねばならない。しかしその神秘的な魔力は、素晴らしく織り合わされていることのうちに、ひそやかな種類の形態のうちにはじめて姿をあらわす。この形

態は具体的なものを抽象的なもののうちに、抽象的なものを具体的なもののうちに映し出す。庭師は „いとりどりの“ 生、この生の „純粋な“ 衝動、その冷たさ、無邪気と威厳とが同居している „影のように透明な身振り“ などと語る。彼には宇宙との了解が与えられたのである。なぜなら今や „すべての創造物の真の道“ がまるで、限られたものにしか解けない魔法の数字のようにそこに在るからである。この庭師——王こそが生の人物達を解読し、守護することが出来るのであり、それ故に彼は全体との調和のうちに事物の慰めを経験し、その隠れた王になることを許される。なぜなら彼は謙虚にへり下って、それらの従者になるからである。この老人がホーフマンスタール自身の解釈によれば幸福なのである。なぜなら彼は生を見抜いて、生をまるで重すぎるマントのように脱ぎ棄ててしまっているから。

ここまでで既に各人物の役割はかなりはっきりとされてきたというべきだろう。詩人は切り離されたものを一体をなすものとして科白を展開した。老いたるかつての王は、生き抜いた彼の運命を後にして天国的な時間のない状態に出入りしている。存在のもつ、 „純粋“ 乃至は „敬虔“ とされる根源的な形の中で分離されていたすべてのものがそこに止揚されているのである。

次に登場するのは若い男 (der junge Herr) である。暗緑色の狩猟服を着て、折返しのある、丈のある、黄色い長靴をはき、馬の手綱をとっている。彼はやっと活動を始めたばかりで、科白の中で夢から生への移行を先取りしている。詩人、庭師と同様 „私は (Ich)“ で語り始める韻のない6乃至は7行のヤンプスである。

その語る内容はある日の出来事に対する回顧である。出来事は早朝のひ

とりでの散歩と奇妙な老人との出会いではじまる。その老人は乞食のようにも、王のようにも見えた。このような人に、黙って王冠を棄てさせ、夜になる前に宮殿を去って二度と帰って来ないようにかり立てたものは何であったのかという問いにはこれに先立つ庭師の登場によって観客には既に解答が与えられている。しかしこの若い男がそれを与えられていたとしても、その解答は彼にとり、あいまいで、不明瞭なものでありつづけた筈である。なぜなら庭師に於いて既に生の一過程として起ったことが、若い男に於いてはこれから克服さるべき課題として未来のうちに横たわっているからである。

Ich weiß, ich bin zu jung, und kann die vielerlei
 Geschicke nicht verstehn; vielmehr sie kommen mir
 Wie Netze und Fußangeln vor, in die der Mensch
 Hineingerät und fallend sich verfängt; ich will
 So vielen einmal helfen, als ich kann.

私は未だ若すぎる、さまざまな運命を
 理解出来ない、むしろ運命は私には
 綱や鉄菱のように思える。人間は
 その中に落ちこんで、落ちながらひっかかる
 私はそんな人をいつか助きたい、出来るときに。

ホーフマンスタールの解釈に従えば、孤独の持つ憂愁は青春特有のものだが、同時にまたすべての物の本質を夢想的に先取りすることも青春のも

のなのだ。がそのとき他の人との個別化を完全に意識していたわけではなかった。この若い男は未だ、完全に彼の夢、彼の孤立、孤独の考えにふけている。この点で最初の登場人物である詩人と似ている。詩人は人間の運命とは幻想的に物を見ることだとしていた。これらの運命について詩人が漠然と知っていたことは彼自身の自己が何らかの形でその中におりこまれているということであった。彼は自らの孤立の幸福を持ちつづけてはならず、兄弟たちの生に歩み出して、彼等と結びつかなければならなかった。ホーフマンスタールがここに与えた二つの顔、若い男と彼の馬はこの二面性、この境界を暗示するものかも知れない。その中で個人と最高の幸福との同一性は解消され、回り道をしてはじめて新たに見出されるものなのである。

二重化は白昼夢によっても現われ、そのことをこの若い男は回顧するよ
うに語る。夢の象徴的イメージが無意識なものから立ち現われる。

Da fing

Ich gleich zu träumen an. Ich jagte, war der Traum :
Zu Fuß und mit drei großen Hunden trieb ich Wild,
Gekleidet wie auf alten Bildern und bewaffnet
Mit einer Armbrust, und vor mir der dichte Wald
War angefüllt mit Leben, überschwemmt mit Wild,
Das lautlos vor mir floh. Nichts als das Streifen
Der Felle an den Bäumen und das flinke Laufen
Von Tausenden von Klauen und von leichten Hufen
Auf Moos und Wurzeln, und die Wipfel droben dunkel

高い梢は 鳥たちがひっそりと逃げる
 ために暗い。はなればなれの かししいり乱れる
 群をなして黒雷鳥のはばたきや野鴨のこぐような音がざわめく。
 山鳥の驚いた群の間を蒼鷺が走る。
 その横を不安げに殺戮も忘れて鷹が急ぐ
 これらをみなわたしは追っていった。
 嵐が黒雲を追うように。けわしい断崖の黒い谷間まで。
 私はこの狩りのたのしさに満たされたが、胸の中は重苦しかった。
 すると突然私の父のことを思わずにはいられなかった。
 足もとの泉の中に彼の白髪を見たかのような気がした。

幸せにもしてくれるが、胸をしめつけることにもなるこの世界の秘密を
 求めての野獣狩りは最後に不気味な底なしのものに到達する。そして老い
 た父と深い泉のイメージの中にすべての生れたものと過ぎ去ったものとが
 同時に出会う。そこからは人間のみが運命を受けとることが出来るのであ
 る。この若い男は „夢“ と „生“ とが分かれる境界に立っていると言える
 だろう。

未だすべての道はこの若い男の前に開かれているし、未だ孤独の夢の幸
 福は壊されてはいない。にも拘らず彼には一つの道のみが予め定められて
 いる。この道はまず „早朝“ の幸福から出発し、多くの試練へと人を導く
 が結局はこの早朝に帰ってゆくものなのだ。>私自身について《 》の中で
 ホーフマンスタールは後に „テュケ (Tyche)“ と呼んで „個人を自分に
 もたらすために、個人を自分から遠ざけようとする世界“⁽²⁾と的確な要約
 を行っている。この若い男が自らの生の希望であると語るこの自己の根源

から出発して再び自己の根源へというこの循環運動は彼に先行する庭師の姿のうちに既に実現されていた。この庭師はこの循環運動を既に彼の方法で通り抜けてしまっていたのであった。この循環が自分の前に横たわっていることを若い男は重苦しさを感じながら予感する。このようにしてはじめての3人の登場人物によって一つの構成が作られ、その中央には庭師が位置することになる。庭師は詩人と若い男の存在によって呈示される問題を解決するのである。

夜が完全に更けて他郷者が登場する。服装からして腕達者な職人、金細工師であるかも知れない。彼は橋の上で立ちどまり、水を眺める。彼はこれまでの登場人物以上に水について語る。水の中を彼はのぞきこむ。水は彼自身の存在と運命の要素として示される。再び2行目と4行目に脚韻があらわれる。水とともに„子供の夢“もその場から絶えず流れ去る。絶えずその形を変えながら。彼の失ってしまった夢の観察者として我々はこの自己に出会うのである。遍在する幸福は思い出の中にしか存在しない。しかし„宝物“が水と共に流れていってしまうから、新たな課題が生れてくる。余りに多くのもの、余りに多様であるが故に溶けて流れていってしまう真実を、一つのものの中に、持続的なものの中に、閉鎖的であるものの中に守り、つくり上げてゆくという課題が生れてくるのである。この人物の若々しく彫塑的な姿は既に流失しつつある生の夢の秘密を、たとえ姿が変わっても引きとめる機会があることを意味するだろう。人生の中央に立っていると思われるこの他郷者は個別化を意識した段階を代表する。がまた彼は至高の幸福への移行を実践している。既に彼はそのものとしては彼から既に流れ去ってしまった青春の前存在を吐息する無意識なものの中に新たに体現しているのである。

この他郷者の登場で新たな要素が劇の中に生れたように見えるが運命としての生が既に終了している庭師と、運命に対する自己をこれから決定しなければならぬ若い男との中間に彼は位置する。夢と生とはこの異国からやってきた男によって、再び合一されるのだ。詩人の中でまだ前段階であったものが、ここでは芸術能力の実現のうちに、持続的で有効な科白のうちに展開されている。ここでも人物達の構成を思い起こせよう。運命としての芸術行為のための作品により自己を決定している他郷者はまた詩人で始まる方向づけを一層高めて継続するのであり、また行為としての運命を既に背後にしていたり、眼前にしていたりした二人の人物の中間存在なのである。劇中の演技が大きくなるにつれ、演技者達相互の関係も増し、相互に及ぼす影響も拡がってゆく。この関係が人物達の本質を次第次第に境界のないものへ、宇宙的なものへと拡大してゆく。

夜が更けると若い少女が登場する。彼女は未だ半ば子供であって、いわば „吐息する無意識のもの“ の生きた具体化である。彼女の全存在は予感と子供じみた感情のうちのみ展開される。この夢見る存在の科白はそのリズムが民謡の素朴さにも似た造形的なものである。

Die Nacht ist von Sternen und Wolken schwer,
 Käm jetzt nur irgendeiner daher
 Und säng recht etwas Trauriges,
 Indes ich hier im Dunkeln säß!

夜が星や雲で重い、
 いま誰かがきて、

悲しい曲を歌ってくれるといいのに
 私がこの闇の中に坐っているときに！

その漠然とした全体のうちに大道歌手が歌う死の床の女についての遠くの歌との対比が感じとれる。その女の生は通りすぎてゆく悲しい夢のように消えてゆくが、彼女はこの夢を解釈することが出来ない。この少女はその悲しい旋律にあこがれる。この女の生の歌が答えているのである。その女の生には自己の運命は支えられず、ただせき立てられただけのものがあった。時が通りすぎた後に残ったものは疲労と受動的な終息のみであった。このような悲しみの持つ不可解さと非現実性とはこの若い少女に対して逆説的に自身の幸福感情の高まりを意味する。

この遠くから聞こえる二つの歌に、疲労と眠気、憧憬と憂愁の雰囲気は共通する。あるときはあふれんばかりの幸福から生れ、

Wie groß ist doch die Welt!
 So viele Sachen sind darin.

何と世界は大きいのでしょうか！
 たくさんのものがその中に入っている。

あるときは生の喪失の意識から生れている。

Müdigkeit,
 Nichts andres blieb bei mir.

疲労だけ、
あとは何も残っていない。

夢は生、生は夢であるが如く終末は始まりに戻ってゆく。少女と先の若い男とはホーフマンスタールの指示によれば特別な形態をつくる。なぜなら二人は期待と無意識の内的な豊かさのために幸福であるのだから。再び私自身のために《 によれば „庭師“ と „若い少女“ と „詩人“ とは „統一への回帰“ という指導動機のもとに再び並置されているのである。 „一つの本質が人間と植物の相似性によって庭師に明らかになり、距離によってすべてを受け入れる形式によって少女に明らかになり、観察された生活の人物によって詩人に明らかになる“⁽³⁾のである。

完全な夜がはじまるとこの劇の最も重要な人物が登場する。狂人である。若く、美しく、穏和である。彼の前方にあかりをもった従者、彼の後方に医者。狂人は言葉にいい得ぬ程の優雅さで橋の欄干によりかかる。そして夜の眺めを楽しむ。これまで演じられてきた役割のすべてがこの人物の中で頂点に達する。

狂人は3つの科白の中に自らを反映して、その姿を明らかにするのである、先ず従者、そして医者、そして最後に自らを解釈することにおいて。

先ず従者がトロカイオスでこの狂人の伝記と運命を語る。ホーフマンスタールの詩に現われる人物達が登場する。嗣子、浪費家、舞踏家。権力者と強者の世代がこの狂人に先行している。彼はホーフマンスタールの《人生の歌》(Lebenslied) (1896) の浪費家のように生の深淵の上方へ浮遊しながら、何ものにも煩わされずに運ばれてゆく。その際彼は王の如き孤

独さと愛するものに対する憧憬という二つの富によって生きている。彼はすべての征服者、収集者、蓄積者の彼方に舞踏者の解放感とかるやかさを有している。この舞踏者の相続した、山積する権力と美しさの財宝はまるで炎に焼かれたように消えてなくなっている。従者は彼のかつての人生の歩みを描写する。彼はその千里眼の力で芸術家達に、創造者自身にもごく漠としか意識されていない彼等の芸術作品のこの上なく深い秘密を打ち明けては、それを持って吐息をついて彼の道を歩んでいったのであった。彼はたとえそれがどんなに美しく、どんなに力強くても、個々の物と強く結びついていないので表面の殻の下の本質の核が彼にはあらわれるのである。彼の魅力は魔術的であり、彼のすべての生にかかわるものについての関心は無限であるのだが、何ものも彼を妨げたり、止めたりすることは出来なかった。

彼はゆく道の最後に沈黙の存在の持つ秘密の中へ入りこもうとする。しかしそれを存在の中から奪いとることが出来ず、内向性の道を歩む。魔力を持つ道具類の道。内面と外面、小宇宙と大宇宙のかくれた呼応を説くパラツェルズスの深い秘密を備えた本の道を歩みはじめるのである。

Mit dem ungeheueren Gemenge,
 Das er selbst im Innern trägt, beginnt er
 Nach dem ungeheueren Gemenge
 Äußern Daseins gleichnishaft zu haschen.

自分が内面に持っている
 途方もない混沌で、彼は

外面存在の途方もない混沌を

隠喩のように捕えようとしはじめる。

どんな種類の世界関係も彼にとっては今や比喩の中でしか実現出来ない。このことは必然的に個性の犠牲を意味する。„狂気“がその象徴である一つの過程である。なぜならこれらのすべて捕えられた比喩の中では問題は本質なのであるから。川でも、石でも、木々でも。これらのものはかつては勝者でありつづけ、いまはおだやかで頼りなげなこの人にとって兄弟になってしまった。狂気の男は新たな特別な自由を獲得した。この自由はもはや個人的、個性的なものから生れてくるのではなく、世界の奥底への侵入から、自己の宇宙的な超自己への解消から生れてくるのである。この点から見ると彼にとっては人間によって生の舞台上で演じられる役割のすべては只の影でなければならない。ホーフマンスタールの詩《大魔術の夢》(Ein Traum von großer Magie) (1895)の中では人間の精神が彼の椅子を最も高い星におき、これによりすべての空間と時間との差異を夢のような方法で解消するところで重力の力は終るのである。この全体の中への移行は狂気の男の中でもくり返され、続いて発言を行なう医者 of 簡潔な客観描写の中では単なる自己解消として、生のまっただ中での死として現われる。そして彼は医者として生のあらゆる領域での全一を予感するのである。

狂気の男の自己解放のうちにはじめて神秘的な上昇が無限に向って進行する。この意味で狂気は演技の超越である。只の„殻“でしかあり得ない役割を演じなくてはならないのではなく、只、直接、一つの本質と、全体と一つになるために役割を演ずるのである。狂気の男が手鏡の中に自分を

見ると彼にとって彼自身の自己は仮象になってしまう。„外へ“と自己を究極的に地上的な外面性から解き放つ声が叫ぶ。全体のもつ真の形式の意味はすべて解消である。待望の死はここでは神秘的な統合、深淵への落下となる。狂気の男が„物事を秩序立てること“が彼の仕事だと自称する意味は詩人や王達の持つ秩序を与える力などではないのである。その力は常に外側からの生の克服でしかあり得ない。常に複製でしかなく、決して存在そのものとしてはあり得ないものである。狂気を男が求める„秩序立てる“とは自己の全ての拡大であり、それによってすべての外的なものが内的なものへと入ってゆく。すべての内的なものが直接的には全ての現実を秩序立てる力であることを証明するのである。

Was aber sind Paläste und die Gedichte :

Traumhaftes Abbild des Wirklichen!

Das Wirkliche fängt kein Gewebe ein :

Den g a n z e n Reigen anzuführen,

Den wirklichen, begreift ihr dieses Amt ?

王宮や詩が何であるのか

現実を夢のように模したものではないか！

現実を如何なる織物も捕えることは出来ない

舞台全体を 現実の舞台を導くこの仕事を

お前達は理解しているのか？

このようにして狂気の男は詩人ではじまる一連の登場人物の中で最も高

いところに達する。詩人が不確かな影とみなしたものを狂気の男は凌駕しながら、それらすべてのようでありたいと思い、それを生きたいと思うのである。このようにして彼はより高い世界に最も広範囲に関与し、この完全に幸福な男は愛と栄光の世界にすべての創造物と夢のように関わりながら人間の共同社会から足をふみ出すのである。

Ich bin schon kaum mehr hier!

私はもう殆んどこのものではない！

感情の高ぶりのあまり彼は欄干から川の中へとびこもうとするが二人のおだやかな力によって押しとどめられ、明るく軽い嘲笑の叫びを上げるのである。

Bacchus, Bacchus, auch dich fing einer ein

Und band dich fest, doch nicht für lange!

バッカス、バッカス あんたを捕まえた奴がいる

そしておまえをかたくしばった でも長いことではないぞ！

さまざまな段階、程度はあってもこの境界のない状態に „小世界劇場“ の „幸福な人びと“ が近づいてゆき、その状態は彼等の実存の一種の総体としての狂気の男のうちに頂点に達する。人形芝居の人形のように互いに似てはいるが、それぞれ異なっているのだ。 „役割“ を意識するうちにこ

これらの「幸福な人々」のそれぞれを、すべての個性を消してしまう最高の幸福な状態から未だに分けへだてる距離が見えてくるのである。全体に対する一人々々の視点はどんなに違っていても、すべての場合にこの全体は「幸福」として体験されるのである。詩人はそれを幻想のうちに先取りするが、それを影めいた非現実的なものの中に放置する。庭師は純粋な認識を実行するうちにそれを所有するのだが、既に彼の背後には運命の巨大な分裂が迫っている。若い男は喪失が不可避であることを感じており、それは長い迂回路を経て補われねばならない。他郷者は既にそれを子供時代と共に失ってしまっており、それを流れゆく水の中からまとめようとしている。若い少女は遠い距離から彼女に対して開かれている生への期待のうちにそれを持っていた。狂気の男だけが登場人物全体を先導する資格を持つ。なぜなら最後の一つを除いて彼はすべての殻を既に投げ棄て、背後におき去りにしてしまっているのであるから。しかし夢と現実との同一性を不条理な程度まで行ない通した彼とても尚しばらくは単なる「外面」の役割りにしばられているのである。かくして神秘的な結合は、それにも拘らず「劇場」の彼方に横たわる達成されない目標のままでありつづける。既に若いホーフマンスタールは永遠なるものと一時的なものとの間の距離を熟知していた。この観点から彼の後期への道は理解し易くなるかも知れぬ。

〔テキスト〕

Hugo von Hofmannsthal :

Gesammelte Werke

Gedichte und Lyrische Dramen 1970

〔文献〕

B. v. Wiese: H. v. H. Das Kleine Welttheater

E. Kobel: H. v. Hofmannsthal 1970

P. Szondi: Das lyrische Drama des Fin de siècle 1975

J. Prohl: H. v. H. u. R. Borchart 1973

〔注〕

(1) H. v. H. G. W. Aufzeichnungen S. 215

(2) *ibid.* S. 218

(3) *ibid.* S. 225